日本科学技術ジャーナリスト会議 会報 No.84
2017.9
Japanese Association of Science & Technology Journalists
JASTJ NEWS

被災地のヒマワリの残像―伝え続けること

内城喜貴

あの年の夏、20本ほどのヒマワリが穏やかな風に揺れていた。都会の雑踏の中でその残像が突然広がることがある。東日本大震災で壊滅的な被害を受けた宮城県名取市の閖上（ゆりあげ）地区。700人以上の老若男女が犠牲になった。そこに日和山と呼ばれる小山がある。この地区の子どもたちがあの年の春に種をまき、元気に育ったヒマワリが咲いていた。眼下には家屋の礎石だけを残し、たくさんの遺体が見つかった荒れ地が広がっていた。悲しみを押し殺して手を合わせ祈る人たち。そしてヒマワリ。多くの修羅場の記憶の中でなぜか一番鮮明な残像だ。

通信社の東北担当として大震災の前から仙台に赴任していた。激しい揺れで単身赴任のマンションは一部損壊。福島・浜通りの本家は黒い津波にのまれ従弟を失った。だが大震災の取材現場は壮絶を極めていたから、落ち込む時間などなかった。多くの記者たちが想像を絶する現場と向き合っていた。その総数は約半年で800人ほどだったか。若い記者たちは「寄り添えない」もどかしさを感じながら昼夜を徹して泣きながら原稿を書いた。気は張っていても、心身ともに疲弊する。応援組は２週間ほどで交代させた。皆、帰りたがらなかった。東京に送り帰す貸し切りバスの中で偉そうに話したことを思い出す。「君たちの仕事は伝えることだ。どこに戻っても震災報道はできる。ずっとずっと伝え続けてほしい」。

その言葉が今、ブーメランのように自分に戻ってきている。２年前に通信社の現役を卒業し、この６月には顧問も辞めた。今はある国立研究開発法人で国内外の科学全般に関するニュースを編集、発信する仕事をしている。たまに通信社の論説記事も書く。まだ取材し記事を書けることに感謝している。

そうした都会の日々の中で大震災の記憶を忘れる。だからこの夏も閖上・日和山に立った。かさ上げ地には公営住宅や水産加工団地が建った。だが、海岸近くは変わらず荒れ地ばかり。復興は「道半ば未満」だ。両親だろうか、中学生14人の犠牲者の名を刻んだ慰霊碑の前で手を合わせる男女がいた。悲しみが癒えることはない。それでも閖上地区の「閖上の記憶」や「語り部の会」など、被災地の人たちは「あの日」を「伝える」活動を続けている。

ずっと機会がなくて昨年JASTJの会員になった。今年５月からは理事として微力ながら運営のお手伝いもしている。メディア組織の現場を離れ、還暦もかなり過ぎてしまった。「伝える」ために自分はこれから何が、どこまでできるか、と正直思う。だが、JASTJには戦後の「科学の光と影」をずっと見続け、伝え続けてきた多くの大先輩がいる。

「フェイクニュース」「オルタナティブファクト」。最近訳の分からない言葉が流布される。「非寛容」「分断」の流れがある。そうした中で、大震災で失われた科学に対する信頼もまだ回復していない。今こそ、ジャーナリズム、科学ジャーナリズムが向き合わなければならない、と思う。歴史と伝統があるJASTJとしても、個人としても「忘れない」、そして未来の世代に責任をもって「伝える」。できることはたくさんある。そう強く思っている。　（JASTJ理事）

CONTENTS

巻頭言……1
ニュース……2
なんでも検証プロ「原発事故調報告」／５委員会が活動本格化／WFSJ新理事決まる／科学ジャーナリスト塾開講／賛助会員との交流会
例会報告（６月）原発コストと事故処理負担金……5
例会報告（７月）“軍事研究”学術会議声明……6
見学会報告　国立科学博物館「深海展」……7
会員だより　サメの魅力を伝えたい……8
会員だより　皆既日食に魅せられて……9
オピニオン／WEB編集長から……10
事務局だより……12

なんでも検証プロジェクト始動 原発事故調報告書を再検証

福島原発事故後に発表された４つの事故調査委員会報告書を事故から6年半たったいま再検証しようという「なんでも検証プロジェクト」が、日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）の会員有志の手でスタートした。国会事故調の委員長を務めた黒川清・政策研究大学院大学名誉教授に9月11日、インタビューしたのを皮切りに、各事故調の代表者らに報告書の提言がその後どこまで活かされているかなどを聞く予定だ。

「なんでも検証プロジェクト」はJASTJの活動の一つで、理事会の承認を経て会員有志が特定のテーマについて研究・調査などを進める。今回の「事故調再検証委員会（仮称）」も理事会の承認を受けて始まった。

JASTJは報告書発表の直後に会員有志で4事故調報告書を比較検証し、2冊の本を出版した。しかし報告書の提言は国会で十分に検証・総括されぬまま、原発再稼動も始まった。こうした現状をどう評価すべきか、報告書に立ち戻って再検証しようと柴田鉄治理事らが呼びかけ、13人の会員が集まった。これまでに5回、日本記者クラブで会合を開き活動内容を検討、国会、政府、民間、そして可能なら東京電力の各事故調の委員長らにインタビューし、その結果を映像と文章にまとめてJASTJのホームページで公表することにした。

9月11日の黒川氏のインタビューには柴田、高木靱生、西野博喜、大江秀房、中道徹の各理事と、倉又茂、荒川文生、伊藤隆太郎の各委員のほか筆者が参加、約２時間にわたって事故調報告書発表後の原子力政策など日本の現状をどう評価しているかなどを聞いた。

東京・六本木の政策研究大学院大学でインタビューに答える黒川清・元国会事故調委員長（一番右）　（撮影　高木靱生）

その中で特に、黒川氏が①委員長としての仕事は報告書を出した時点で終了したが、報告書はほとんど無視されている、②その根本原因は、反省や総括なきままあいまいにする日本社会の特性にある、③記者クラブ制によるジャー ナリズムと腰が引けた法曹界、官僚組織への批判、④原子力安全教育の重要性――などを指摘した点が特に印象に残った。

今後、政府事故調の委員長だった畑村洋太郎氏には10月初めに、また委員長だった北沢宏一氏が故人となった民間事故調は報告書取りまとめの中心になった船橋洋一氏に10月半ば以降にインタビューする計画。

（理事　林勝彦）

会員との連携強化へ 5委員会が活動を本格化

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）のさまざまな活動を、担当理事だけでなく、意欲ある会員も加わって運営できるようにする狙いで2017年度に５つの委員会を発足させた。要となる総務･財務をはじめ、月例会・見学会や塾の運営を担う企画、会報・WEBを担当する編集、科学ジャーナリスト賞、国際活動の各委員会が、早速本格的な活動を開始した。

（会長　佐藤年緒）

■ 総務・財務委員会

課題見定め、解決・実行

「科学技術ジャーナリズムの向上、発展のために、会員間や会員とニュース・ソースとの交流を促進し、ジャーナリストやコミュニケーターとしての資質・見識を高めることを目指すとともに会員相互の親睦をはかる」という会の目的に資するよう、総務・財務の運営や業務にかかわる課題と解決策を上げ、実行する。2017年８月末までに２回、委員会を開き、事務局員の役割・業務の明確化、会計管理方法の改善に向けた方策立案、JASTJの魅力向上に向けた方策立案などを実施（9月に第3回を開催予定）。新たな課題の解決策を立てながらPDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルを回していく。

（漆原次郎）

■ 企画委員会

相互研さんに役立つ企画を

科学ジャーナリスト塾と月例会を担当する企画委員会は、まず9月開講の第16期科学ジャーナリスト塾に向けて塾生経験者らを交えた意見交換をし、今期の塾の計画を立てた。その結果、「プロと学ぼう！～企画する、取材する、伝える～」と題して、塾生が講師の話を聞くだけでなく、現場取材や受講生が決めた個々のテーマについて執筆、合評、添削を経て最終作品に仕上げるまでの全過程を体験するプログラムとして塾生を募集した。

月例会は、科学的観点からの理解が鍵となる社会問題や最先端科学の話題などをテーマに月１回開催。科学者、技術者、産業人、研究者、行政官などを外部か

ら招いて話を聞くほか、会員からも講師を募り、会員相互の研さんに役立てる。（瀧澤美奈子）

■ 編集委員会

会報とウェブの連携強化へ

編集委員会は８人体制で運営、理事会と一般会員の交流を促し、会報とウェブを活用しながらJASTJの活動内容を社会に発信していく。「今年の10大科学ニュース」などテーマを決めてアンケートを実施するなど会員参加型の企画のほか、ホームページに会員の自己PRページや書評欄を設けるなどの新企画を検討する。例年に習い、第16期科学ジャーナリスト塾の報告レポートをホームページに掲載するほか、会報で紹介することも検討している。

また、会報とウェブの連携強化、科学ジャーナリスト賞受賞作の保存や整理を含めたアーカイブ作りにも取り組む。このため会報とウェブの編集や制作機能を強化し、これまでそれぞれ1人で担当してきた会報は編集長と副編集長の２人、ウェブは３人体制にした。（柏野裕美）

■ 科学ジャーナリスト賞委員会

JASTJカフェで会員の参加促す

「科学ジャーナリスト賞2018」の候補作募集は７月からスタート。今年度新設した科学ジャーナリスト賞委員会は賞の選考委員会とは別の組織で、科学ジャーナリスト賞のあり方などについて会員参加で話し合い、相互交流を促して参加意識を高めることを目的としている。そのため委員はもとより、多くの会員が積極的に参加できる機会を設ける。そこでまず、候補作を手に取ってみたり、映像作品を鑑賞したりする気楽な集まり「JASTJカフェ」を開く。平日の午後に事務局に集まって、お茶でも飲みながら作品を楽しみたい。義務感から作品に接するのでなく、科学について知ることの楽しさを再発見する催しにしたいと考えている。第１回を９月20日に開催、２回目を11月か12月に計画中だ。（滝順一）

■ 国際委員会

アジアと連携し共同プロジェクト模索

世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）と連携して進めたアジア諸国の科学ジャーナリスト養成プログラム「SjCOOP Asia」は2015年に終了、インドネシアとベトナムに科学ジャーナリストの協会が作られた。2015年にソウルで開かれた科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ2015）では、韓国、フィリピン、タイなど、アジア各国の科学ジャーナリストとの交流が進んだ。国際委員会は今後も各国と連携をとりながら、共同プロジェクトを模索していきたい。

今年の世界会議（WCSJ 2017）は米国・サンフランシスコで開催される。JASTJは会員の参加費、旅費などのサポートを予定している。同会議では、各国の科学ジャーナリスト賞受賞作を紹介するプログラムが予定されており、JASTJは英語字幕付きの「東電テレビ会議　49時間の記録」（2014年科学ジャーナリスト大賞）を提案した。（小出重幸）

5委員会の構成メンバー（順不同）

委員会	委員長	委員（理事・監事）	協力会員・元塾生
総務・財務	漆原次郎	藤田貢崇、中道徹、山本威一郎、湯浅誠	
企画	室山哲也	瀧澤美奈子、縣秀彦、飯島裕一、内城喜貴、柏野裕美、勝田敏彦、鴨志田公男、舘野佐保、中道徹、西野博喜、引野肇、保坂直紀、元村有希子	都丸亜希子、高山由香、早野富美、今野公美子、伊藤隆太郎、藤田豊、中川美帆
編集	高木靱生	漆原次郎、大江秀房、柏野裕美、武部俊一、西野博喜、山本威一郎	高山由香
科学ジャーナリスト賞	滝順一	漆原次郎、室山哲也、飯島裕一、内城喜貴、小出重幸、佐々義子、柴田鉄治、武部俊一、林勝彦、　元村有希子	
国際	小出重幸	瀧澤美奈子、高橋真理子、柏野裕美、牧野賢治	

（注）JASTJ事務局の中野薫、保科尚子、山中由美子が各委員会の運営を支援

世界科学ジャーナリスト連盟 理事改選で小出さん惜敗

世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）は理事７人のうち任期満了となる４人の改選を加盟団体の代表によるWEB投票で実施した。JASTJからは小出重幸・前会長が立候補したが、１票差で５位と惜しくも敗れた。

新任理事に選ばれたのは、南アフリカ（獲得票数29）、アルゼンチン（同26）、バルカン（同19）、ケニア（同16）の候補だった。このほか、ネパール、インドネシア、ナイジェリア、メキシコからも立候補があった。女性は南アフリカとバルカンの２人。それぞれの顔写真やプロフィール、「立候補の弁」は選挙期間中にWEBで公開された。

今回の改選では、WFSJに加盟する55団体のうち42団体が投票、４団体は「連盟会費未払い」などの理由で無効となり、38団体（69％）の投票が有効だった。日本からはJASTJのほか日本医学ジャーナリスト協会も投票した。（理事　高橋真理子）

科学ジャーナリスト塾が始まりました！

「プロと学ぼう！～企画する、取材する、伝える～」をテーマにした第16期科学ジャーナリスト塾が始まった。9月7日に東京・内幸町の日本プレスセンタービル8階会議室で開講式が開かれ、受講生14人のうち12人が出席した。塾長の室山哲也理事が「主役は皆さん。塾が終わったときに、自分なりに勉強になったことが一つでも得られるよう取り組んでください」と挨拶、各回の講師を務める理事や事務局員、塾の運営をボランティアで支える元塾生らサポーターを紹介した。

ガイダンスでは、塾のカリキュラムとJASTJを紹介、次回への宿題として「これが東京だ」をテーマにした写真１枚と、今期の塾修了時までにそれぞれ完成したい作品の企画案をA4 １枚にまとめてくるようにとの説明があった。「とにかく書いてみる。書けば次の扉が開く」という室山塾長のアドバイスに、塾生は熱心に耳を傾けた。

開講式に集まった塾生たちに挨拶する室山塾長ら（撮影　高木靱生）

その後、会場では塾生と塾関係者が「私のキーワード」を書いたA4 １枚の紙を持って互いに自己紹介しながら話しあった。最後に、柴田鉄治理事が「科学ジャーナリズムとは――失敗から考える」をテーマに、日本の科学ジャーナリズムが何をしてきたか、何ができなかったのか、について講演した。

科学ジャーナリスト塾は来年2月までほぼ隔週木曜日に10回にわたって開講、塾生は座学と現場取材を組み合わせたカリキュラムで実践的に学ぶ計画だ。（理事　柏野裕美）

賛助会員との交流会開催

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）の運営を支える賛助会員との交流会が8月7日夕刻、東京・内幸町の日本記者クラブ9階大会議室で開かれた。賛助会員6団体から11人を招待、日ごろの支援に感謝を表すとともに、JASTJの活動に対する意見や批判をいただいた。JASTJからも22人が会費制で参加した。

滝順一副会長の司会進行で、佐藤年緒新会長の挨拶から交流会は始まった。佐藤会長は「5月からJASTJは新体制となったが、今後も賛助会員との交流を深め、さらなる応援を賜りたい」と挨拶、乾杯後に懇談に入った。会場では、参加者が立食で料理を囲みながら親睦を深めた。

交流会で賛助会員からの意見に耳を傾ける参加者たち（撮影　高木靱生）

その後、新体制で発足した各委員会の担当理事が活動状況を紹介した。月例会や科学ジャーナリスト塾などを担当する企画委員会は瀧澤美奈子副会長が、国際委員会は小出重幸理事（前会長）が、会報など編集委員会は高木靱生理事が、科学ジャーナリスト賞活動委員会については滝副会長がそれぞれ報告した。賛助会員も挨拶に立ち、カクタス・コミュニケーションズの湯浅誠代表は「JASTJのホームページは今の時代に反映していないのではないか」と指摘、英語ページを増やし発信力を強める必要があると述べた。他の賛助会員からもさまざまなアドバイスをいただき、最後は林勝彦理事の一本締めで閉会した。

この日、大型台風5号が和歌山県に上陸し、関東地方に大雨が予報されたが、開始時と閉会時にタイミング良く雨はやみ、参加者は行きも帰りも雨足にたたかれずに済んだ。（理事　西野博喜）

原発コストと事故処理負担金

大島堅一・龍谷大学教授に聞く

福島原発事故から６年半、政府は原発をベースロード電源と位置付けて再稼働を進めているが、こうした国の政策をどう判断すればよいのか――。東京理科大学で６月９日に開いた月例会では、発電コストの観点から原発の問題点を指摘してきた大島堅一・龍谷大学教授に、「原発コストと事故処理負担金を語る」というテーマで話を聞いた。

「原発コストに対する考え方は、福島原発事故の前後で大きく異なる」と大島さんはいう。事故前、原発コストは１キロワット時（kWh）当たりいくらかかるかという発電コストで考えていたが、事故後は損害賠償や除染、安全強化対策、廃炉などの社会的費用も含めたコストと考えるのが当たり前になった。こうした費用は運転終了後や事故後、非常に長い間にわたってかかり、最終的にいくらになるかわからない。「それが原発の特徴だ」という。

原発に経済性はあるのか？

政府や東京電力の試算では、福島原発の事故費用はすでに16兆円を超えた。さらに昨年末に東電委員会が出した資料によると、将来的に25兆円以上に膨らむ。しかし大島さんは「燃料デブリの処分費まで入れると30兆円も見えてきた」として、「いったん原発事故を起こすと世界最大規模の東京電力ですら経営困難に陥る」と指摘した。

原発コストの計算法には、新たに建設する原発を40年間無事に運転する費用から計算するモデルプラント方式と、過去40年間に電力会社が使った費用から計算する実績値方式がある。国は事故前、モデルプラント方式で１kWh当たり5.3円と計算していたが、事故後の2014年には10.1円と試算、やはり「原発が一番安い」と結論付けた。このとき石炭火力は12.3円、風力は21.6円とされたが、世界的には「なぜ日本はこんなに風力が高く、原子力が安いのか」と言われたという。

原発事故に伴って膨らむ費用負担についての話などを熱心に聞く参加者
（撮影　いずれも高木靱生）

大島堅一・龍谷大学教授

福島原発事故後、欧米では安全対策が強化され原発の建設コストは上昇。ところが日本は原発事故以前に建てた原発をモデルプラントとして計算している。「事故を経験したのにこんなおかしいことはない」と大島さん。仮に日本が英国並みに計算すれば、原発は石炭火力より高い15.7円になるとして、「原発に経済性があるとはいえない」と指摘した。

さらに、原発事故の費用負担問題については、事故後の閣議決定で関係者の責任を問わず原子力損害賠償機構が支援、返済義務のない資金を交付することになった。事故炉廃炉費用は「管理型積立金制度」とし、損害賠償は一般負担金部分の「過去分」を全消費者から回収、いずれも国民負担となった。さらにその第二段階として管理型積立金、過去分のいずれも電力自由化による送電部門の託送料金が利用されることになった。

事業者にモラルハザードも

これに対し大島さんは「汚染者負担原則を崩すもので、事業者のモラルハザードを起こす」と指摘。また、託送料金は国会のチェックが働かず、情報も公開されないので経費が膨らむ危険がある、などと述べた。

講演後の質疑では、「政府にはできない政策にアカデミアからモデル提言はできるか」などの質問が出た。また、再生可能エネルギーの将来性や賠償金の内容など、さまざまな観点からの質問にも、大島さんは事故後の政策決定のプロセスに触れながら答えてくれた。講演を聞いて、今後長期にわたって国民生活に大きな影響を与える課題に対して、国の政策決定プロセスはこれでよいのか、という疑問を強く抱いた。

（会員　西岡朝明）

“軍事研究”学術会議声明をどう読み解くか

井野瀬久美恵・甲南大学教授に聞く

戦争を目的とする研究はしない――。1950年と67年の２回にわたって声明を発表し、一貫した姿勢を示してきた日本学術会議がいま揺れている。防衛装備庁が15年度から始めた「安全保障技術研究推進制度」を巡って大学や研究機関、研究者個人が「軍事的安全保障研究」の是非を考えなければならない時代を迎えているからだ。およそ1年間の議論を経て、今年4月に学術会議が発表した「軍事的安全保障研究に関する声明」をどう読み解くべきか。7月13日の月例会で、学術会議副会長として声明のとりまとめ役の一人となった井野瀬久美恵・甲南大学教授に話を聞いた。

透明性が取りまとめのカギに

学術会議は16年5月に「安全保障と学術に関する検討委員会」（委員15名、杉田敦委員長）を設置し、6月以降毎月1回、審議を進めた。委員会での審議事項は、①50年及び67年の決議以降の条件変化をどうとらえるか、②軍事的利用と民生利用、及びデュアル・ユース問題、③安全保障にかかわる研究が学術の公開性・透明性に及ぼす影響、④安全保障にかかわる研究資金の導入が学術研究全般に及ぼす影響、⑤研究適切性の判断は個々の研究者や機関等に委ねられるか――の5点だった。

審議を振り返って「今回の声明を取りまとめるのは至難の業だった」と井野瀬さんは強調した。安全保障技術研究推進制度にすでに応募している大学の一つである豊橋技術科学大学の学長でもある大西隆・学術会議会長をはじめ、多様な背景を持つ研究者が委員として参加していたからだ。「審議の過程や苦労話、私見について発言したくても我慢しなければならないことが沢山ある」と話す井野瀬さんの姿が印象的だった。井野瀬さんは今年９月まで副会長の任期を残している。

「軍事的安全保障研究に関する声明」の歴史的位置づけに聞き入る参加者たち　（撮影　いずれも高木靱生）

井野瀬久美恵・甲南大学教授

それでも、今回の声明を何とか取りまとめることができた背景には、委員会が議論の透明化に徹底して務めたことが要因の一つだという。異例の措置だそうだが、すべての委員会会合において詳細な議事速記録を導入し、机上配布資料や学術会議内外からの意見、関連新聞記事等までも学術会議のウェブサイトで公表し審議経過をオープンにした。そのようにして議論が暴走しないよう抑制的に進めてきたという。

印象的だった歴史学の視点

井野瀬さんは西洋史（主にイギリス近代史）を専門とする歴史学者。学術会議では人文・社会科学分野の研究者を代表する第一部の委員で、理系中心に思われがちな学術会議の中で、文系の視点にたって問題提起や意見表明をしてきた。今回の例会でも、文系研究者らしく多様でち密、かつ膨大な資料を準備してきてくれた。講演の後半では50年声明発表を巡る歴史秘話も披露してくれた。50年声明の取りまとめも、今回同様またはそれ以上に高いハードルがあり、一言で戦争の反省といっても研究分野ごとに受け取り方が全く異なっていたという指摘が印象的だった。

エクスキューズが多いとの批判もあるものの、学術会議は過去の２つの声明を継承し、戦争を目的とする研究はしないと社会と研究者に表明した。ただ、声明文にもあるように、その判断・実行は各大学や研究機関、学術分野ごとの学協会に委ねられた。10月から始まる第24期学術会議が傘下の学協会とどう向き合っていくのか、注視していきたい。また、研究者以上に社会に近い立ち位置にいるメディアやジャーナリストにとっては、軍事的安全保障をどう捉え報道していくのかを、改めて意識する機会になったのではないか。　（理事　縣 秀彦）

（注）声明文は http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-2.html ／ 検討委員会の審議等は http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/anzenhosyo/anzenhosyo.html を参照。

科学博物館「深海展」を見る

国立科学博物館（科博）で開催されている「深海2017　～最深研究で迫る“生命”と“地球”～」の見学会が９月６日、開かれた。深海生物から海底地震まで幅広いテーマを扱う展示に小雨が降る中、JASTJから科学ジャーナリスト賞選考委員の白川英樹さんや浅島誠さんも含む39人が参加。見学会後の懇親会では林良博館長らと活発な意見交換をした。

展示から溢れる情熱

会場見学の前に、林館長が科博の現状を、動物研究部の倉持利明部長が最新の成果概要と見どころを紹介、植物研究部の細矢剛博士が自然史博物館の役割についてレクチャーしてくれた。この後、会員は自由行動で特別展と常設展示を見学して回ったが、盛り沢山の内容に時間は足りないようだった。3.11以後、今回の展示の共催者である海洋研究開発機構（JAMSTEC）から発表される地震研究成果の根底には、精密な観測技術と平常時からの地道なデータ収集があることがわかった。

見学会当日も平日の午後とは思えない人出があり、深海展の人気の高さを感じた。前日には入場者数が40万人を突破、これまでに無い規模の見学者を動員しているという。筆者は7月の連休にも見学に訪れたが、そのときは幼児からお年寄りまで、さまざまな人が熱心に展示物に見入っていた。「キャー！ヤダー！」「気持ち悪い！」「凄い！」と興奮した声も響いていた。特異な外観をした深海生物だけではなく、イラストで解説された最新研究成果や、掘削機の使用済み部品など、特に華やかとは言えないような展示にも、熱心に見入っていた。

ちいさな子供や専門知識を持たない人まで、なぜあれ程興奮し、惹き付けられるのか？この疑問に対し、倉持部長は「研究者達の本物の情熱が伝わるから感動するのでしょう」と教えてくれた。心が反応する展示――。2001年に科博が独立行政法人化して以来、右肩上がりに入場者数を増やしている大きな理由だろう。

内容豊富で見切れなかった「深海展」の展示に見入る。

日本の“財産”守る最後の砦

3.11以前から深海での地震研究に取り組んでいた海洋研究機構は、毎月のように成果を発表している。プレスリリースでの広報が一般的だが、成果をより広く伝えるアウトリーチ活動も重要だ。企画展には研究機関が成果を発表する場という機能もある。

科博は、その役割を大きく三つに分類している。「調査・研究」「標本資料の収集・保管」「展示・学習支援」だ。予算等の都合からどれも課題が多いが、特に閉館などに伴い行き場を失った他機関の収蔵品の保管場所が問題という。もし科博が引き取りを断われば、廃棄するしかない資料が多いという。100年以上前に作られた植物標本など、二度と作れない貴重な資料が危機にさらされている。科博は日本の“財産”を守る「最後の砦」となっている。

つい数年前にも、100年以上前の植物標本の気孔の数から当時の大気の状態を知るという研究が発表された。5年前には無かった技術が明日開発され、画期的な発見に繋がるかもしれない。いつか来る「その日」の為にも、貴重な資料の散逸や劣化を防ぎ、収集を続けられる保管庫が求められている。

深海展では人気の深海生物よりも広いスペースを割いて、巨大災害、海底資源、地球環境、深海を調査する機器を取り上げている。例え恐ろしい地震や、資源の枯渇でも、研究によって解明し改善できることがあることを伝える意図があるからだ。「恐れるだけでなく、データを取り、考え、一緒に頑張ろう」――。こんなメッセージが科学者達から伝わってきたような気がする。　（会員　高山由香）

見学に先立って林館長らからの説明を聞く参加者たち。（撮影　いずれも高木靭生）

サメの魅力を伝えたい

私が「シャークジャーナリスト」という肩書きで活動をスタートしたのは2012年。ご存知のとおり、シャークとはサメのこと。国内、海外のサメに関するエピソードがありそうな場所へ足を運び、魚市場で漁業関係者にインタビューしたり、必要があれば水中でサメを観察したりしてサメの取材をしている。情報発信は主にSNSで、その他に、雑誌に記事を書いたり、お声がかかればバラエティ番組、ドキュメンタリー、ニュース番組やラジオ番組に出演してサメを語る。また、日本で一番大きいサメフリークのコミュニティーを運営しており、そのメンバーやサメ好きキッズに向けて、体験型のサメイベントを企画している。研究施設や保全団体に所属せず、フリーランスという立場でサメの真実を世の中に伝える。おそらく、シャークジャーナリストは世界に唯一ではないか。

神々しさ感じる野生の姿

子どもの頃から生き物が大好きだった。水生生物を育て一喜一憂するのが楽しかった。必然的に大学は水産系へ進学した。そこでサメとの出会いがあった。大学一年のときに購買で「サメ・ウォッチング」という書籍を手に取った。数メートルもある巨大なサメはサメグループ全体からするとほんのわずかで、ほとんどのサメは1.5メートルより小さい。中にはわずか20センチ足らずで成熟しているサメもいる。サメによる死亡者数は世界中で平均して年間10人前後。蚊による死者は年間何十万人以上だというし、野犬による死亡率でも数万人、はたまた雷に打たれて亡くなる方の方が圧倒的に多いという統計もあるらしい。え、そうなの？！　内容は目から鱗。サメは、一般的な印象である人食いマシーンではなかったのだ。

公開講座で子どもたちにサメの魅力を伝える　（提供　筆者）

そうは言っても野生のサメには出会ったことがない。実際に体験してみよう。小笠原諸島父島を訪れた。海況が悪く、透明度の悪い水の中、海底洞窟の中からシロワニという２メートルを超える強面のサメが目の前に現れた。心拍数が上がったが、サメはまったく私には興味を示さずにゆったりと泳いでいた。怖いというよりも、神々しさを感じた。「サメの研究者になりたい！」――。初めて対峙した野生のサメを前に強くそう思った。

パプアニューギニアで出会ったエポーレットシャークの一種と筆者　（撮影　中村卓哉）

「怖い」に偏る印象変える発信を

大学と大学院ではサメの生態について学んだ。しかし、サメの研究をしているというと、「何で人を襲うような生き物を研究しているの？」だの、「そんな研究は意味がないから辞めちまえ」だの、根拠のない中傷を受けた。当時、マグロ類のように経済的に価値のある魚を有用魚種と呼んでいたが、サメはそうではない。注目されなかったり、印象が悪かったりするせいか、助成金がつかないことも多く、サメの研究者を志し半ばであきらめる学生も少なくなかった。ご多分に漏れず、私もそのうちのひとりだった。この状況を変えたかった。無力な私ができることは何だろう。まずは、サメの印象が「怖い」に偏らないように世の中に情報を発信することではなかろうか。

今年７月に茨城県のある海水浴場で、ドチザメが目撃されて遊泳禁止になったというニュースがあった。ドチザメというサメは、水族館などで子どもたちが触れてよい、プールにいるおとなしいサメだ。サメというだけで、人喰いとみなし、画一的な対応をするのはいかがなものか。まだまだ私の活動は始まったばかりだ。　（会員　沼口麻子）

皆既日食に魅せられて

８月21日（現地時間）に北米で皆既日食が観測された。月の影が西海岸から東海岸まで横断するのは99年ぶりとあって、全米では大きな盛り上がりをみせ、トランプ大統領夫妻も８割ほどかけた部分日食をホワイトハウスで観望したとニュースは伝えた。日本からもNHKが日本時間22日深夜に生中継をするために、また数100名を超えるアマチュア天文家や日食目当てのツアー客が渡米した。私もその一人だった。

何度見ても感動する

世界中から集まった観光客や報道陣は、気象が比較的安定している北米中央部から西側の都市に集中した。宿泊費が通常の10倍にも高騰したホテルもあり、旅行社は航空運賃なども含め1週間足らずの日程で約50万円を超える旅費で参加者を募集した。それでもキャンセル待ちが出たというから、皆既日食に憑（と）りつかれた人は多いようだ。

今回の皆既帯では多くの場所で天候が良く、普段は見ることのできない太陽の姿を2分前後にわたって見ることができた。2012年11月の豪州・ケアンズの皆既日食の際には雲に一部が重なり、完全なコロナを観測できなかったが、そのリベンジとして今回は、晴天率が高いと予想されていたアイダホ州（アイダホフォールズ）まで出向いた。事前に確保した郊外の高校の敷地内では朝から雲ひとつない晴天に恵まれ、持参した天体望遠鏡と一眼レフカメラで撮影に成功した。

観測機材と筆者（アイダホフォールズにて）（撮影：浅川徹）

私が初めて皆既日食を観測したのは1973年のアフリカ・ケニアである。大学の研究サークルが1963年7月に北海道・羅臼岳で観測に成功、その10周年を機に企画された観測隊に参加したのがきっかけだった。当時は大学院生だったが、研究室とは無関係な太陽コロナの偏光観測と局地予報のテーマを趣味として選んだ。ケニアの砂漠の真ん中で見た初めての皆既日食は快晴下であり、今も鮮明に記憶している。

皆既直前のベイリービーズと彩層！（撮影：筆者）

太陽が極限に細くなると、月の影が西の空から急接近して太陽照度が指数関数的に激減、シャドーバンドという地表を流れる影の直後にはダイアモンドリングが輝く。そして黒くなった太陽の周囲には白色を基調とするコロナとピンク色の彩層が輝きを放つ。そのときの衝撃的な光景は何度見ても感動する。

時の流れは日食とともに

日食は地球から見て太陽と月の軌道が交わる現象で、「サロス周期」と呼ばれる日食群に区分され番号が付けられている。これは同じような日食が18年と11日、または10日毎に繰り返す周期のことで、太陽と月の運動から紀元前のカルデア人によって発見されたと言われている。地球上では1サロス毎に同じような特徴の日食帯が、経度で約120度西にシフトして起きることがわかっている。3サロスは54年と約1カ月（トリプルサロスという）で概ね地球を１周するが、正確には日食帯の位置や形状は少し異なる。

今回の日食のサロス番号(145)は、実は1963年北海道皆既日食と同じであり、早いものでトリプルサロスが経過したことになる。あっという間の半世紀だが、「月日」の経つのが慌ただしく早く過ぎ去るさまを「烏兎怱怱（うとそうそう）」と言う。これも月と太陽に関係した言葉である。

人類や生命にとって欠かせない太陽と月が交わる天空の奇跡は、地球上の一地点では平均約360年毎にしか見ることができないと計算されている。2035年9月2日の北陸から関東において見られる身近な皆既日食まであと18年。大枚を払わずに何とか国内でコロナを見てから天に昇りたいと想う昨今である。

（理事　山本威一郎）

オピニオン

原発政策の隠された意図

福島原発事故以降、原子力発電は他の発電方式より経済性が優れているという“神話”が崩れる中で、日本は原発再稼働を着々と進めている。国民の多くが反対し、経済的にも非現実的と言えるこうした政策を、政府が推進しようとする意図はどこにあるのか。6月の例会で大島堅一・龍谷大学教授の話を聞きながら、気になって仕方がなかった。

福島事故以前には、原子力発電のコスト（総括原価に算入されるもの）は１キロワット時当たり5.3円だとして、その経済性が喧伝されてきた。事故後の見直しで、これまで総括原価に算入されて来なかった関連費用の一部を算定した結果、日本の電気事業における発電コストは１キロワット時当たりで原子力13.3円、火力9.9円、水力3.9円（1970～2010年度実績）とされた。原子力については、福島事故の賠償、除染廃棄物や燃料デブリの処理・処分、使用済み核燃料の再処理費用などを算入すれば、その発電コストはさらに増大する。

しかし、国のエネルギー基本計画を受けて、2015年に政府のコスト検証ワーキンググループが試算しなおした結果、原子力が10.1円、石炭火力が12.3円、風力が21.6円、太陽光（住宅）が29.4円となった。これに対し大嶋教授は、①原子力で今後の費用増大が見込まれていない、②風力や太陽光のコストが欧米に比べて異常に高い――ことなどを指摘、極めて意図的な試算であると批判した。

日本政府がこうした非現実的とも言える政策を推進しようとする意図は何なのだろうか。その検証なしにエネルギー政策を進めることは、福島の復興に寄与しないだけでなく、自然を破壊しつつ人類破滅への途を盲進することになりかねない。

第二次世界大戦以降の原子力開発の歴史をひも解くまでもなく、「原子力平和利用」の美名のもとに進められた原子力発電が宿命の如く負わされていた「使命」が国家安全保障上の核戦略であったことは、新聞の論説でも主張されるようになるなど日本でもタブーではなくなった。このような事実を覆い隠すうえで不可欠な企業活動が停止されることは、国家安全保障上の核戦略から見て極めて“不都合な事実”なのかもしれない。

日本のみならず、世界各国の原子力政策の展開には、核戦略の展開が自然破壊と人類破滅への途となることに伴うこの「矛盾」が見て取れる。この矛盾を秘密として「保護」することを含む「秘密保護法」の制定も一層の危険を示していると言えるのではないか。　（会員／地球技術研究所　荒川文生）

WEB編集長から

JASTJのホームページをご覧いただきありがとうございます。ウェブ関連の報告と予告をします。

■科学ジャーナリスト賞募集を案内

「科学ジャーナリスト賞2018」の推薦作品を募集する案内を掲げました。2017年1月から2018年1月末までに発表された作品が対象で、推薦書の締め切りは2018年1月31日。詳しくは「科学ジャーナリスト賞」のページをご覧いただき、ご推薦いただければと思います。

「第16期科学ジャーナリスト塾」開催と塾生募集の案内を、ホームページやフェイスブックページで行いました。今後、塾生が執筆する塾活動の報告などを「塾」のページで展開していく予定です。

佐藤年緒会長の「あいさつ」を、新たに「JASTJについて」のページに掲げました。ご覧いただければと思います。

■会員の自己紹介ページなど新設へ

編集委員会、理事会、賛助会員との交流会などの場で、ウェブ関連のさまざまなご提案をいただきました。今後、ウェブ関連で立ち上げる予定の企画をお伝えします。

10月開催予定「第10回科学ジャーナリスト世界会議」と連動し、「科学ジャーナリスト賞」を英文で紹介する予定です。

前号の告知どおり、会員同士、また会員と外部の交流をはかるため「JASTJ会員自己紹介ページ（仮）」を発足させる予定です。各会員のご活動ぶりなどを発信できる機能です。ぜひ、ご参加ください。

「書評欄（仮）」を立ち上げる予定です。本の紹介を通して、会員、塾生、著者、メディアなどの交流や、JASTJの認知度向上をはかっていきます。

多くの方にご協力、ありがとうございます。今後もよろしくお願いします。　（Web編集長　漆原次郎）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

（50音順、2017年9月現在）

鷗友学園女子中学高等学校	東京理科大学
花王株式会社	株式会社東芝
国立研究開発法人 科学技術振興機構	豊清工業株式会社
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	ロート製薬株式会社
株式会社構造計画研究所	AE 海老名・綾瀬法律事務所
サントリーホールディングス株式会社	賛助会員募集中
一般財団法人　新技術振興渡辺記念会	賛助会員募集中

■ 新入会員の自己紹介

● 鈴木 紀之

第14期科学ジャーナリスト塾の受講生として、文章の書き方や取材の仕方について学びました。今後は、サイエンスライターやジャーナリストの方々との交流を通じてサイエンスコミュニケーションの能力を高め、生き物の進化や昆虫の生態に関する研究成果を分かりやすく解説していきたいと考えています。

● 三島 勇

今は、読売新聞社を退職し、法務省で働いています。新聞社では、社会部で司法、都政などを担当した後、科学部に移り、原子力、環境の各分野で取材をしてきました。やり残した「福島第一原発」問題を追っていければと思っています。

● 石川 航平

サイエンスライターの志望理由は、科学技術の普及に、商業出版における書籍の執筆を通じて関わりたいと思ったからです。職業はライターとして、著作権のエージェントに所属しています。専門は、主に製品開発や研究開発マネジメントです。

● 柴藤 亮介

インターネットを活用した学術情報の発信全般に興味を持っております。どうぞよろしくお願いいたします。

● 藤田 豊

長年香料会社に勤め、香料開発や海外拠点立ち上げに関わってきました。日本社会では理系と文系を必要以上に分ける傾向があるので、両者の橋渡し的なことができないかと考え、昨年第15期の科学ジャーナリスト塾を受講させていただきました。

● 照山 恵美子

朝日新聞社に定年まで 37 年間勤務した後は、昭和女子大学英語コミュニケーション学科で非常勤講師を 7 年間務めました。学生と日々を過ごせたお蔭で若返りを果たせています。英検1級、通訳案内士資格保有。仏語も多少話します。趣味は下手なゴルフとスキーです。

● 河野 光登

研究所において食品素材の生理機能研究に従事しています（主に大豆タンパク質）。特定保健用食品の表示許可申請や機能性表示食品制度の届出にも関係しており、行政との戦いの日々です。

● 野口 悦

大学にて医学研究に関するプレスリリースの編集を主に担当しております。科学の面白さや、研究で分かったことが社会の中で応用されていく様子を正確に伝えると共に、研究者の思いまで届けられたらと考えています。

会員の BOOKS　新刊紹介

重力波 発見！　新しい天文学の扉を開く黄金のカギ

高橋真理子著（新潮選書・1300円+税・2017年9月）

JASTJ副会長の瀧澤美奈子さんに「重力波の本を書いている」と話したら「何で？」と聞き返された。その後に続く言葉は聞きはぐったけれど、きっと「そんな売れそうにない話題を？」だったのだろう。そう、重力波は大多数の人にとって関心の外にある。それを重々承知で、関心のなかった方たちに向けて、石器時代の昔から人類が空間と時間をどのようにとらえてきたかを探り、2015年の重力波初観測に至るまでの「知の歴史」を書いてみました。　（理事　高橋真理子）

「やばいこと」を伝える技術　修羅場を乗り越え相手を動かすリスクコミュニケーション

西澤真理子著（毎日新聞出版・1,000円+税・2017年9月）

「なぜ、正しいデータを詳しく伝えたのに、読み手はわかってくれないのか？」。科学的な内容を一般の読者に伝える際、誰でも一度はこう感じたことがあるでしょう。その原因は読み手の知識量や理解度の差だけでなく、「可能性がある」「リスクがある」といった、専門家にとっては当たり前の表現による誤解、数字や論理よりイメージに引っ張られやすいという、人の持っている認知の仕組みも大きく影響しています。本書では、リスクコミュニケーションについて、プロはもちろん、一般の方にもお使いいただけるよう、実際に起きた事例を基に、解説しています。　（会員　西澤真理子）

すごい進化　「一見すると不合理」の謎を解く

鈴木紀之著（中央公論新社・860円+税・2017年5月）

進化は生物の巧みなデザインをもたらした原動力ですが、私たちの直感に合わない現象もあり、誤解が多いのも事実です。本書では、「オスが違う種類のメスに求愛してしまう」といった、一見すると完璧ではない生物の行動に着目し、その背後にある合理性についての謎を解いていきます。「性（オスとメス）はいやいやながら進化した説」をはじめとした、他のポピュラーサイエンスの本では紹介されていない最新の成果も多く掲載しています。　（会員　鈴木紀之）

編集後記

▶ニュース欄でもお伝えしたように、今号から理事の柏野裕美さんに副編集長として編集作業に加わってもらうことになりました。やる気十分の若手ですので、ときに厳しく、でも暖かく今後の活躍を見守ってあげてください。（靭）

▶まずは編集の流れから学ばせていただいております。JASTJの活動をしっかりとお伝えできるよう、WEBとの連携も図り、皆様にご指導ご鞭撻をいただきながら副編集長を努めてまいります。どうぞ宜しくお願い致します。（裕）

編集・発行

日本科学技術ジャーナリスト会議
Japanese Association of Science & Technology Journalists (JASTJ)

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3 東京理科大学1号館13階
電話：070-1448-8800　Email：hello@jastj.jp
会　長／佐藤年緒　事務局長／藤田貢崇
編集長／高木靭生　副編集長／柏野裕美

ホームページ http://www.jastj.jp